

# 『あすなる物語』の世界

工藤 茂

『わが文学の軌跡』は辻邦生と篠田一士が聞き手となって井上靖からその半生の文学の軌跡を聞き出した記録である。

その中の「自伝風作品について」の項に次のような会話がある。

篠田 井上さんのお仕事では、昭和三十年代の半ばから自伝的な小説というのが始まりますね。それがずっとつづいて、最近では『北の海』が本になって出たわけですが、けれども、これは現代小説というものの中に入れていいかどうか、ちょっと問題があるかとも思いますけれども前にも『あすなる物語』というものをお書きになつていますし、こういうものはもちろん私小説とはぜんぜん違いますし、また、いわゆる回想記というものとも違いますし、それから、いままで話題にした現代小説というも

のとちよつと違いますし、ぼくは非常におもしろいものだと思うんです。(略)ぼくはこの一連の小説は、人が思うほど単純で簡単なものじゃないと思いますけれどもね。(後略)

篠田一士は井上靖が自伝的な小説を書き始めた時期を昭和三〇年代の半ばと設定し、その自伝的な小説が決して単純で簡単なものではなく、私小説とか回想記あるいは現代小説とも異なつた複雑な性格を持った小説であることを指摘している。

この指摘に対して井上靖は、次のような彼自身の考えを述べている。

井上 あの一連の小説については、私は「自伝風小説」といい方をしています。幼少時代から少年期までを取り扱つたもので、自分をはめ込んだ遠い歳月を書くこと

いいですか。

篠田 まあ、おつくりになるわけですね。

この後続いて井上は、再現させようがないので、おそらくこうであろうという書き方をすることと、情緒の記憶をそれに入れていふことを述べ、篠田がそれを受けて「会話なんかにロマネスクなつくりがあるわけですね。」とまとめていふ。

ここで述べられているのは、井上靖の複雑な性格を持つ「自伝風小説」が、作家のどのような操作によって創造されたか、ということであった。「自伝風小説」であるから、虚構になることは当然であつて、それが作者のそこに必然的に導かれる想像力と情緒の記憶によって構成されるという創作の秘密を讀者に明かすところに、この会話の興味があつた。

ところで、ここで私が考えてみたいのは、この一連の「自伝風小説」に『あすなる物語』が含まれていたのかどうかということである。論を進めていく都合上、これらの小説の発表期間とその掲載誌（紙）を發表順に列挙してみよう。

『あすなる物語』（昭和二八年一月号〜六月号）『オール読物』（一）

『しろばんば』（昭和三五年一月号〜三七年二月号）『主婦の友』（一）

『夏草冬濤』（昭和三九年九月二七日〜四〇年九月一三日）

『産経新聞』（一）

『北の海』（昭和四三年二月九日〜四四年一月一七日）

### 『神戸新聞』等地方紙五紙）

先に引用した会話において、篠田が「昭和三十年代の半ばから自伝的な小説」が始まると言っているのは、右の一覧によれば『しろばんば』から始まったということになる。そうすると『あすなる物語』はこの一連の小説に含まれないことにならう。ただ篠田はその後で「前に『あすなる物語』というものをお書きになっていますし、こういうものは……」というように会話を續けて、『あすなる物語』をもこの一連の小説の中に入れて発言している。ところがその後を受けた井上靖の会話では、「幼少時代から少年期までを取り扱ったもので」となっている。そうするとその内容、つまり小説の内容から考えて、少なくとも井上はその場の意識においては、『あすなる物語』をその一連の「自伝風小説」から除外して考えていたことにならう。

昭和五〇年一月二〇日中央公論社から刊行された『北の海』に付されている帯に、「わが青春への鎮魂譜」と題された著者自身の解説が印刷されている。それによると「自伝風の小説」として著者の考えているのが、『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』の三編であることがわかる。また、昭和五二年六月二〇日日本経済新聞社より第二刷を刊行した『過ぎ去りし日日』において言及している「自伝風の小説」もその三編だけであつて、『あすなる物語』は除外されている。

ここに私は『あすなる物語』と他の一連の小説とを微妙に区

別しようとしている作者の意識を見る。そこで『あすなる物語』と他の三編の小説との相違を、発表した年の問題、主人公の名前、内容などの点から考えてみよう。

先に掲げた四編の小説の一覧によって明らかかなように、『しろばんば』以下の作品は二年未満内至二年数ヶ月の比較的に短い期間に書き継がれている。それに対して、『あすなる物語』と『しろばんば』との間には六年六ヶ月の歳月の隔たりが置かれている。従って『あすなる物語』は独立した小説として考えることができる。一方、『しろばんば』以下の作品は明らかに連作意識に支えられて書き継がれたものと見なすことができよう。それを何よりも証拠だてているのが主人公の名前である。『あすなる物語』の主人公は梶鮎太であるが、『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』の主人公は一貫して洪作（伊上洪作）である。さらに両者の相違は、その内容において顕著である。『しろばんば』は洪作が小学生であった時代を、『夏草冬濤』はその中学生時代を、そして『北の海』は、洪作が旧制高校の受験に失敗した浪人時代をそれぞれ取り扱った小説であるのに、『あすなる物語』は梶鮎太の小学生時代から、中学、大学を経て新聞社に入り、やがて敗戦後の社会を体験するまでの経緯を、六つの時期に分けて描いている。前者はまさに井上の言う「幼少時代から少年期までを取り扱ったもの」であるが、後者は一人の人間の成長を、社会人となつて敗戦後の社会体験をする壮年時代まで、

長編小説の形式を借りて描いたものであった。虚構の多少を問題にすれば、最も虚構性の高いものが『あすなる物語』で、それから順次『北の海』『夏草冬濤』と低くなり、『しろばんば』が最も事実に近いものようである。

さてここで冒頭に引用した『わが文学の軌跡』の部分にもどつてみたい。篠田、井上の前記の話を受けて辻邦生がこれら一連の小説を次のように述べている。

辻 広い意味でいいますと、日本には珍しい一種のビルドゥングス・ロマンスとして考えられますね。これはなんといつても、精神的な意味でも、魂、感性の意味でも成長の記録ですからね。たとえばいまの手帳を手がかりとされても、そういうふうの一つの発展の糸をほぐすように展開されるわけですから。いままでそういう一人の魂の発展という意識で人間をとらえることは少なかったと思ふんですね。

魂や精神の発展や成長を描いた小説が、日本の近代小説に皆無だったわけではない。たとえば夏目漱石の前後期三部作や島崎藤村の『破戒』、志賀直哉の『暗夜行路』などもそうであろう。だが辻の言うようにそういう小説が少なかったことも事実である。同じ対談で篠田が指摘しているように、日本では断片的な私小説が書かれてきたのだから。

それはさておき、辻の指摘は『しろばんば』以下の作品を大きな流れをなす一連の小説と見なすことによって成立する

ものである。各小説を独立した個々の作品として考える場合には、それはむしろ『しろばんば』『夏草冬濤』『北の海』のそれぞれの小説よりも、『あすなる物語』の性格を示すものとしてより適切であった。なぜならば、『あすなる物語』が梶鮎太の幼少時代から壮年期にいたる魂と感性の成長過程を、長編小説の形式で書いたものであるのに対して、『しろばんば』以下の小説は『あすなる物語』のそれぞれのある一時期を、詳細に再構成することによって成立しているのだから。さらに言えば『しろばんば』は『あすなる物語』の「深い雪の中で」の時期に対応するものであり、『夏草冬濤』は同じく「寒月がかかれば」の時期の再構成である。そして『北の海』は「寒月がかかれば」と「漲ろう水の面より」の中間に位置すべき時期を詳密化した小説であった。(ただし辻の指摘のように、『しろばんば』以下の連作に「一人の魂の発展という意識で人間をとらえ」ようとする作家の眼が光っていることは事実である。)

これまで述べてきたように、『あすなる物語』と『しろばんば』以下の小説とは、やはり微妙な相違が介在していた。亀井勝一郎はかつて『あすなる物語』を井上靖の『詩と真実』であると見なしていた。<sup>(3)</sup>この見方を『あすなる物語』ではなく『しろばんば』以下の小説にあてはめて、後者を「自伝風小説」として考えてみることにしよう。

そして前者については三枝康高の指摘に従って教養小説（ビレタウシク・ス・ロア）

(ゲーテの「ウイルヘルム・マイスター」をもととした名称)と見なしておきたい。(なお『しろばんば』をゲーテの『詩と真実』に擬する考え方は、既に三枝の評論に見えている。)<sup>(5)</sup>これらの作品を以上のように分類整理してみると、それぞれの作品の性格がはっきりしてくる。それを一層明確にするために、次に著者自身による自作解題をまとめておく。

#### 「あすなる物語」

小説「あすなる物語」は鮎太という主人公の少年が、青年期、壮年期と生い育って行く過程を、六つの時期に分けて、小説の形に綴ったものである。あすなると同じように、いつの時期も鮎太の周囲にはあすは何ものかになろうとしている人たちが多勢いるが、なかなか何ものにもなれないという物語である。人間というものは、みなあすなうである。鮎太もまた例外ではない。(略)六つの挿話とも、その舞台や環境は私自身のものを使っており、到るところに自分の経験したことも取り入れてあるが、物語は完全なフィクションである。従って、形は何となく自伝小説風であるが、自伝小説とは言えない。事実と虚構がふんだんに入り混じっている。(略)

それではこの六つの挿話の中に居る主人公はあなたではありませんねと聞き直して訊かれると、そうです、私ではありません、しかし、私以上に私かも知れませんがとも答える以外仕方ないような気がする。(『井上靖小説全集6』昭和四七年一月二

○日刊・新潮社)

## 『しろばんば』

「しろばんば」は自分の幼少時代を、五十三歳になった私が回想して、小説の形に綴ったものであります。大体において、私はこの小説に書かれてあるような環境に生い育ち、この小説に書かれてあるような毎日を通して、幼年期から少年期へと移って行っています。この作品に登場して来る人物は、おぬい婆さん、さき子も、上の家の祖父も、祖母も、伯父の石守森の進も、みな実在の人物です。この作品に書かれてある事件も、作者の身邊に起こった実際あったことです。(略)

「しろばんば」は、普通、作者の自伝風の小説という見方をされていますが、まことにその通りで、私は幼少時代の自分に洪作という名前をつけて、小説の中で、もう一度幼少時代の生活を繰り返して貰って見たようなものであります。(『井上靖小説全集25』昭和四八年三月二〇日刊・新潮社)

## 『夏草冬濤』

この作品は「しろばんば」と並んで、作者の自伝風な小説と見られています。が、実際に作者自身が「しろばんば」の続篇を書こうといった意図をもって筆を執ったものであります。(略) 洪作は浜松に行つて、一年浪人したのちに浜松中学にはいり、家庭の事情で、二年生の初めに沼津中学に転校していますが、「夏草冬濤」では、沼津中学の三年生から四年生へかけての洪作の生活が取扱われています。(略)

「しろばんば」に於てもそうであるように、私は少年期の一時

期を、「夏草冬濤」に書かれてあるような毎日を送つて過しました。小林も、増田も実在の人物ですし、金枝、藤尾、木部、餅田、みな実在の人物です。

三島の大社前の親戚の家に置いて貰っていたことも、その伯母さんに世話になつていたことも、毎日徒歩で沼津中学に通つたことも、かみきという親戚の家の二人の早熟な少女のことも成績がだんだん下がりがり、そのために沼津港町のお寺に下宿しなければならなくなつたことも、その寺に活潑な年上の娘さんが居たことも、大体において、みな事実を、そのまま書き記しています。

この作品は、文学好きの友達と、船で伊豆の西海岸を旅行しているところで終りますが、これも実際にあつたことで、この旅は、少年期の私にとっては最も大きい事件と言えるもので、この旅を境に私は仲間のお蔭で精神年齢を幾つか加えたように思っています。(『井上靖小説全集26』昭和四八年五月二〇日刊・新潮社)

## 『北の海』

「北の海」は、「しろばんば」「夏草冬濤」に続く、少年から青年への移行期を取扱つた自伝風の小説である。もちろんフィクションもあり、誇張したところもあるが、作中に登場してゐる少年たちには、それぞれモデルがある。モデルになつてゐる友の何人かは天折し、何人かは戦争の犠牲になつてゐる。少年たちは、小説の中ではやたらに荒々しく、純粹で、元氣よく跳

び廻っているが、一方、この小説は、故人となった友への鎮魂の思いに加えて、今も健在である友や私自身の過ぎ去った青春への、いわば鎮魂の譜でもある。(『北の海』昭和五〇年一月二〇日刊・中央公論社の帯に付された「わが青春への鎮魂譜」)  
〈傍点筆者〉

## 二

前章において考えてきたように、『あすなる物語』は梶舘太の魂の成長を描いた教養小説としての性格を持つ作品、と見なすことができる。このことに關して先駆的な見解を示していたのは亀井勝一郎であった。彼はその「解説」<sup>(6)</sup>においておおよそ次のように述べている。

この小説は作者の感受性の劇の告白であり、井上靖の「詩と真実」である。幼い魂の上に刻印されていたもの、白紙のような魂にきざまれてゆく人生の皺のようなもの、それを追求していった小説であった。「あすなる」とは人間のいじらしい存在に向けられた人間愛の象徴のようなものであってそこにこの作品を貫ぬく暖かさがある。このような「あすなる」である人間によって、自分という人間もまた育てられ、人間をも知ってきた。その歴史を書いたものが『あすなる物語』である。

いかにも亀井らしい見方ではあるが、ここには『あすなる物語』の全体を貫ぬく小説の性格が、見事に指摘されている。

もつとも、ここでゲーテの『ウィルヘルム・マイスター』ではなく、『詩と真実』にこの小説を擬したのはいかにもまづかった。『あすなる物語』は自伝風小説とは微妙に相違していたのだから。そこで、これが原因となつて後に三枝康高の批判が生まれてくることになつたのである。

亀井勝一郎の以上のような説を継承しながら、この小説を劣等感を軸とした青春小説として扱っていたのが、福田宏年<sup>(7)</sup>であった。彼は井上靖の精神に内在する劣等感情をめぐり出し、そのよつてきたる原因を井上の都会への気おくれと受験の失敗とに求める。井上の短編「少年」その他の作品に照らして、これは妥当な説であらう。

福田は井上の内面に見たこの劣等感情こそ、亀井の言う「感受性の劇」の感受性の中心をなすものであらうと推論する。そして、井上のこの感情を舘太のあすなる意識に重ね合わせたうえで、『あすなる物語』を井上靖の精神史を鮮やかに写し出して見せた小説であつたと見るのである。

福田のこのような見方は、『あすなる物語』と「しろばんば」以下の一連の作品との間に介在する微妙な相違を判然とさせるものではないが、井上靖の精神に潜む劣等感情を明確に示し、それが彼の文学の芽をなすと指摘する点において鋭い。そして井上の「霧の道」「ある偽作家の生涯」「澄賢房覚書」「敦煌」などを同列の作品系譜として考えているところに、その特色があつた。

『あすなる物語』を厳密な意味において教養小説と規定したのは三枝康高である。<sup>(8)</sup>彼は関徹雄の教養小説の説明を援用して、『あすなる物語』が『詩と真実』にはなく、『ウィルヘルム・マイスター』にこそ擬せられるべきであることを述べたうえで、これを教養小説であるとするのである。さらに彼はこの小説についても一つの見解を提示する。それは彼の次のような結論に示されたものであった。

かくて作者が『あすなる物語』の全篇を通じて語りたかったことは、ただたんに「あすは檜になろう」としながら、檜になれないということの悲哀だけではない。ここではむしろ『アスナロウ』のように、「空間を充滿する死」のなかで、「花粉のように烈しく飛び交う生」の燃焼を、鮎太が閲したゼロ体験として運命的な匂いを発散させながら、物語風に展開しようとしているのである。

ここでいう「ゼロ体験」とは、鮎太が現実に体験したことのない人間としてのアプリアリな体験、または形而上的体験ということであろう。そうであるとすれば、ここで彼が言うおとうとしていることは、『あすなる物語』がただ単に「あすなる説話」の悲哀だけを描いたものではなく、人間に内在する死を見つめながら生命を燃やし続けるという、実体験を経る以前に実存する人間の生のあり方、その人間の運命を描いたものである。ということになろう。もしそうだとすれば、人間の死に直面しながら、自己の生を燃焼させていこうとする

鮎太の体験を描いた「深い深い雪の中で」や、「漲ろう水の面より」「勝敗」の章の位置をどう考えるべきなのか。少なくともこれは鮎太のゼロ体験ではあるまい。

と、ここまで考えてきて、ふと三枝の言う「ゼロ体験」の意味が、『井上靖・ロマネスクと孤独』（有信堂）の著者の文脈から考えて、作品の基盤をなす作者の原体験のことであることに気づいた。とすればこれは鮎太のそれを井上の閲したゼロ体験と置き換えなければなるまい。あるいは三枝は鮎太に井上を重ねて表現したのであろうか。もしそうならば、この論における亀井説の批判は成立しなくなる。

いずれにしろこの論には、右のような論証を超えた主観的な断定や、「星の植民地」（第六章）の要約の錯誤などがある<sup>(9)</sup>。そのマイナスの面が気になるのはあるが、その反面筆者の直観によって提示される鋭い指摘があることもまた、否めない事実なのである。たとえば先に引用した結論に要約される、空間を充滿する死のなかで烈しく飛び交う生命の燃焼を描いたものがこの小説であるとする新しい視点の提示はそのままその一つの例証であった。（この視点の正しさは、「深い深い雪の中で」「漲ろう水の面より」「勝敗」の三章の内容によって証明されると同時に、最後の一章を除く各章が日本の戦争時代をその背景として構成されていることによっても納得できよう。）

ただ、ここにも問題がなかったわけではない。それは、こ

の結論を導くために、三枝が井上靖の詩「アスナロウ」(『風景』昭和三七年九月号所収)を援用したことであった。このことについて、最初に疑問を投げかけたのは越次俱子である。彼女は井上が「あすなる物語」(昭28)を書いた時点において「アスナロウ」(昭37)の詩的体験を持っていたかどうかを問題とし、生命の燃焼の烈しさが「あすなる物語」の根底にあることは肯定しながらも、井上がその詩「アスナロウ」の事实现象を踏まえてこの小説を書いたとは思えないと、三枝の説を否定している。

越次のこの考え方は的確である。なぜならば、「アスナロウ」の原体験をなす井上の下北半島旅行は、昭和三三年三月初旬のことと考えられるからである。福田宏年・新潮社出版部作成の「年譜」<sup>12)</sup>によると、彼が初めて下北半島を訪ねたのは、昭和三三年三月初旬のこととなっている。この時彼は、当時『週刊読売』に連載中の小説『海峡』の取材のために、福田豊四郎等と一緒にその地を旅行している。「アスナロウの交配が寒中、このような吹雪の中で行われる」と表現される詩の季節は、下北半島ではまさに三月初旬のことであろう。しかも彼は同じ年譜によると、それ以後この詩が発表された昭和三七年九月まで、その地を旅行していない。さらに昭和四七年一〇月に井上が書いた「自作解題」<sup>13)</sup>の次のような部分

が、越次の考えを支える傍証となる。

私の郷里の伊豆地方では、槇の木のことをあすなろと呼

んでいる。(略)真物の羅漢柏の「あすなろ」の大群落にお目にかかったのは、下北半島を旅行した時である。その旅から「あすなろ」という一篇の詩を得ている。

(略)真物のあすなろは、私が詩で書いているように、なかなか逞しい木である。(略)

それはともかくとして、伊豆で育った私は、あすなろと言えば槇の木を眼に浮かべるし、伊豆の人たちも今日依然として、槇の木をあすなろと呼んでいる。私には下北半島や能登半島のあすなろより、伊豆のあすなろの方があすなろらしく思われる。幼い頃からそう思い込んで育ったので、それは間違いだと知っても、そう簡単に改めるわけには行かない。それにあすなろ説話の持つ悲劇的性格には、下北半島や能登半島の大群落をなしているあすなろより、伊豆地方の雑木の中に立ち混じっている孤独なたたずまいのあすなろの方がびつたりしている。

この「自作解題」は、前に記したように「あすなろ物語」執筆後およそ十九年経った昭和四七年に書かれたものだけに、かえって「アスナロウ」の詩的体験と「あすなろ物語」の性格を峻別する作者の意図が歴然としていて貴重であった。

ところで、越次自身はこの小説をどのように見ているのであろうか。彼女は吉田健一の「我々を取り巻いてゐる各種の哀感の問題と取り組んでいる作家(井上靖)」という説<sup>14)</sup>、亀井勝一郎の説(前出)を継承しながら、次のように結論づ



けている。

私達の日常生活を取り巻いている哀感を、象徴的に言えば、あすなろのもつ哀しみではないだろうか。青春時代

明日は檜になろう、明日は檜になろう、と夢見ても、年月がたちふり返って見たとき、結局自分は檜にはなれなかつたという後悔を伴ったほろ苦い哀しみが存在する。

それが井上氏のいう「翌檜の悲劇」といえる。(略)

つまり彼女はあすなろの持つ哀しみを、私たちの日常生活を取り巻いている哀感、人生の哀感と考えるのである。悲しみと言わずに哀しみという時、そこにあすなろの持つ本質的なイメージが鮮やかに浮かび上がってくる。そういった意味において、彼女の論は『あすなろ物語』の底流をなす性格の一つをすくい上げてみせたものとなっている。

さて、これまで検討してきた以上四人の論をごく手短かにまとめておきたい。

(1) 井上靖の人間把握の暖かさ、魂の成長の歴史。(亀井勝一郎)

(2) 劣等感情を軸とした青春小説、井上靖の精神史。(福田宏年)

(3) 教養小説、鮎太の生命の燃焼の物語。(三枝康高)

(4) あすなろに象徴される日常生活を取り巻く哀感、人生の哀感。(越次俱子)

このように要約してみると、それぞれが否定することので

きない論であることが納得される。そこでこれらの説を継承しながら、その基盤に立脚してもう一つの『あすなろ物語』論を、次章において述べてみたい。

### 三

『あすなろ物語』を考察するにあたって、私はまず二つの観点を設定しておきたい。その一つは鎮魂譜としての見方、もう一つは民間伝承の投影といった観点である。

『あすなろ物語』は全部で六章から成り立っている。すなわち、

(一) 「深い深い雪の中で」

(二) 「寒月がかかれば」

(三) 「漲ろう水の面より」

(四) 「春の狐火」

(五) 「勝敗」

(六) 「星の植民地」

(一)～(六)は便宜的に付した番号であるが、論を簡潔にするために、以下この番号によって論を進めていく。

これらの各章の構成には、作者なりの一つの工夫が凝らされている。たとえば、(一)は冴子の内面から放射される黒い光と、その死によってもたらされる「暗」の章であるのに対して、(二)は行動的な雪枝の性格が播き散らす明るい光によって「明」の章となっている。(三)は信子の応接室の雰囲気の明る

さと、その裏に潜む時代の暗さが織りなす「明」「暗」両者を含み持った章で、(一)(二)の相反する章を同時に継承するように置かれたものであった。この(三)章の背景となつてゐる時代の暗さは、さらに死の影と重なり合いながら(四)と(五)をほの暗く染めていく。そして(六)は、未来に明るい光芒を予感させる敗戦後の世相を背景として終つてゐるのである。同時にこの「明」と「暗」に對置する形で、人間の生と死が配されてゐる。そしてこれらの構成をその根底において支えてゐるものが、「あすなる物語」であり、戦争体験であつた。

さて、前述した第一の観点からこの小説を考へていくと、どういふことにならうか。

右に掲げた各章のうち、この観点によつて選り出すことのできるのは、(一)(四)(五)の四章であらう。(一)は鮎太に克己といふことを教へながら、彼自身ついにあすなるでしかありえなかつた大学生の加島と、その彼と心中した冴子への、(二)は機銃の一斉射撃を浴び、クリークの漲らう水の面より左手を二回高く突き上げて死んでゐた、鮎太の高校時代の友人金子への、(四)は地方で淋しく死んでいく、鮎太の尊敬を受けながら、社では一向にうだつの上がらなかつた老記者杉村春三郎への、そして(五)は、南方へ行く途中、軍艦の甲板の上で直撃弾を受けて死んでゐた、鮎太のライバルであつた佐山町介への、それぞれの鎮魂譜であつたと見ることができよう。

井上は、この論の一章において引用した「わが青春への鎮魂

譜」において、「この小説(北の海)は、故人となつた友への鎮魂の思ひに加えて、今も健在である友や私自身の過ぎ去つた青春への、いわば鎮魂の譜<sup>15)</sup>もある。」と書いてゐる。また『しろばんば』の「自作解題」において、「今は亡くなつてゐる多勢の人たちをもう一度蘇らせて、その喜びや悲しみを綴つてゐるようなもので、(略)どこかに鎮魂の作業といつたところがあります。」とも書いてゐる。井上自身のこのような見方を取り入れるならば、『あすなる物語』全体をも一つの鎮魂譜と見なすことが可能であらう。つまりこの小説は、敗戦国日本への鎮魂の思ひを叙べたものであり、同時に彼の詩「流星」に重なり合う、戦いと徒らに過ぎ去つた井上自身の青春と、戦死した友への鎮魂の譜であると。この結論が性急であるといふならば、少なくともそのような筆者の原体験が、この小説の背景にはあつただろうと言ひ直してもいい。そしてこのように考へた時、『あすなる物語』は初めて『しろばんば』以下の一連の作品と、その性格において繋がつていくのである。

次に、民間伝承の投影という第二の観点から、この小説の世界を考へてみたい。

「あすなるう」と題した井上靖の作品には、「あすなる物語」以外に次のようなものがある。

(1) 隨筆「あすなるう」(『京都帝国大学新聞』昭和二年五月五日)

(2) 随筆「あすなろう」(『きりん』昭和二三年七月・八月合併号)

(3) 短篇小説「あすなろう」(『サンデー毎日新緑特別号』昭和二五年五月)

(4) 詩「アスナロウ」(『風景』昭和三七年九月)

これらの作品のうちあすなろうの生の烈さを歌った(4)以外は、あすなろ説話の持つ哀感に人間の姿を重ねて語ったものばかりである。昭和三三年三月初旬の下半島旅行の時に接したあすなろの印象が、それまで彼が懐いていたあすなろのイメージを打ち砕いて(4)の詩ができたであらうことは、昭和四七年に書かれた『あすなろ物語』の自作解題(前出)に照らして明らかである。従つて、『あすなろ物語』の世界に考察を加えていく場合には、この小説に集束される井上のあすなろ観に焦点を縮めて検討していかなければなるまい。それを端的に示しているのが次の井上自身の文章である。あすなろという木は、あすは檜にならう、あすは檜にならうと、毎日のように念願しているが、ついに永遠に檜になれぬ木であるという話を聞いたのはいつ頃のことであらうか。小学生の上級生頃か、中学校に進んだばかりの頃か、いずれにせよ、そのくらいの年齢の時ではなかったかと思う。あすなろという木の持つこの悲劇的な性格が強く心に刻まれ、その後あすなろという木を特別なものとして見るようになった。(「自作解題」前出)

亀井勝一郎が「あすなろ物語」(新潮文庫)の解説に引用している作者の感想においても、井上はほぼ同様のことを言っている。従つて子供の時に語り聞かされたあすなろにまつわる伝説が、彼の心に強く印象づけられ、やがて右のような一連の作品を生んでいったと考えることができよう。そして『あすなろ物語』もまた、作者のこのような深い関心に支えられて生まれてきたものであった。このことはさらに、自伝小説ではなく「あすなろの説話の持つ哀しさや美しさを、小説の形で取り扱ってみたものです」(亀井引用の作者の感想)という作者自身のことばによって裏づけられている。それゆえに『あすなろ物語』は、作者の意図においてすでに『しろばんば』以下の小説とは異なつた小説だったのである。

ところで、右に引用した解題で井上が、この話を小学生か中学生の頃に聞いたと述べている点に注目したい。なぜならば、それが民間伝承——すなわち、人々に口によって語り伝えられていたもの——であつたことを意味しているからである。つまりこの説話は、樹木にまつわる伝説とその命名技術というフオーク・ロアだったのである。井上がこの「あすなろ説話」をライト・モチーフ(福田説)として小説を書いたということは、自ら『あすなろ物語』の性格を規定するものとなった。

ここで必然的に生まれてくるのが井上文学と民間伝承との交渉という問題である。かつて私は「口承文芸の片影」<sup>(16)</sup>とい

う小論において、作者そのものの中に口承文芸の語り手としての要素が色濃く存在しているものの一入として井上靖を取り上げ、次のように述べたことがあった。

「井上靖の場合は（略）そこに「男語り」の糸譜を見ることができる。「桃李記」「グウドル氏の手套」「姨捨」「幼き日のこと」に代表される作品は（略）家系、家筋を語る作品である。そしてこのバリエーションが「額田女王」であり「蒼き狼」であり、「後白河院」であった。なお、「しろばんば」「あすなる物語」などには「女語り」の口承文芸が姿を見せ、それが小説に民俗的な色合いを添えて作品の核をなす抒情となっている。また、彼の代表的な短篇「月の光」は口承文芸の「子求め」のモチーフなしには考えられない作品となっている。」

論の性質上概論風に述べたものであったが、この私の見方には現在も大きな変化はない。ここでは二三例を上げながらもう少し具体的に述べてみよう。

たとえば「かしわんば」という短篇小説がある。かしわんばとは和歌山地方において、天狗の前身である陰気な呼び名の妖怪として民間に語り伝えられていたものであって、それがこの小説の重要なモチーフとして使われている。

『しろばんば』には神かくしにあった正吉の話が出てくる。神かくしとは、突然人間が姿を消すという不思議な現象に対して人々が名付けた呼び名であった。しかもこの小説は題名

そのものが民間語源になる「しろばんば」であって、それがこの小説全体の性格を象徴的に示している。また、この「神かくし」そのものを題名とした随筆も彼の作品の中にはある。この随筆や詩「カマイタチ」は、近代社会の中で民間伝承の信仰性が崩壊していく過程をはからずも提示するという、興味深い作品となっている。

そのほか棄老伝説の投影されている「姨捨」、貴種流離譚の型を踏襲している「夜の声」、けもの道の伝承を受ける「道」など、民間伝承の影をほの見せる彼の作品は少なくない。これは伊豆の山村に幼少期を送った彼の体験が、今では失なわれてしまったこれらの伝承を、文学の中に自然に魅らせていった結果であった。

『あすなる物語』はこれらの作品の系列に位置を占める小説である。民間伝承の「あすなる説話」が全体の章をしめるホルトの役割を担っていて、それが微妙なかげり——民俗的なかけり——を作品に投影している。そしてそれがこの作品の抒情を支えているのである。

この小説の中で、右に述べてきた性格を最も象徴的に示しているのは、「春の狐火」の章であろう。狐火という民間伝承に基づきながら、狐に化かされたような一夜を清香との間に持ち、鮎太が一段と成長していくこの章は、ある意味でそのまま民間伝承の世界であった。

〈注〉

- (1) 『海』（昭和五年六月号・中央公論社）に「現代の作家」特別インタビュー」として掲載。後、同社より単行本として刊行された。引用は初出の記事による。
- (2) 『井上靖小説全集』に付されている福田宏年編の「年譜」や、『幼き日のこと』『私の自己形成史』などの随筆と照合してみることによって判断できる。
- (3) 井上靖『あすなろ物語』（新潮文庫、昭和三十一年一月三〇日刊）の「解説」および『井上靖文庫24』（昭和三十六年五月三〇日刊・新潮社）の「解説」
- (4) 三枝康高『井上靖—ロマネスクと孤独—』（一九七三年一〇月一五日刊・有信堂）の四九ページ。
- (5) 注(4)と同書の五五ページ。
- (6) 新潮文庫『あすなろ物語』（昭和三十三年一月三〇日刊）の「解説」および、井上靖文庫『あすなろ物語他』（昭和三十六年五月三〇日刊・新潮社）の「解説」
- (7) 『井上靖の世界』（昭和四十七年九月四日刊・講談社）の第三章「劣等感情と文学の芽」および、『井上靖小説全集6』付録（一九七二年一月、新潮社）
- (8) 注(4)と同書のうち「教養小説『あすなろ物語』」の項。
- (9) たとえば、亀井の「解説」を否定して教養小説であることを主張するのであるが、亀井は新潮文庫のそれでは、自伝小説ではないと言っており、その説くところを見ると、やはり教養小説的見方をしているのである。また「十六章」の要約において、「だれももう『あすなろ』の希望を持つことのできない時代であった。」と書いているけれども、この章ははっきりと戦後の「あすなろ」たちを描いた章なのである。
- (10) たとえば、この小説を厳密な意味において教養小説であると規定していることや、鮎太と他の登場人物との関係が偶然的、運命的なものであるといった把握。そしてそれらの人物との交渉に鮎太がそれなりの生の燃焼を示すといった見方。
- (11) 長谷川泉編『井上靖研究』（昭和四十九年四月一五日刊・南窓社）所収越次俱子『『あすなろ物語』と『しろばんば』』
- (12) 『井上靖小説全集32』（昭和五〇年四月二〇日刊・新潮社）
- (13) 『井上靖小説全集6』（昭和四十七年一月二〇日刊・新潮社）
- (14) 『日本の現代文学』（昭和三十五年三月刊・雪華社）
- (15) 『井上靖小説全集25』（昭和四十八年三月二〇日刊・新潮社）
- (16) 『口承文芸の展開』（昭和五〇年一月二五日刊・桜楓社）所収の拙稿。（本学助教）